

児童期・生徒期からの小学校教員に向けた 教職キャリア形成の筋道 ～予期的社会化の視点から～

藤上 真弓

A Study of Elementary School Teachers' Career Planning
— From the Perspective of Anticipatory Socialization —

FUJIKAMI Mayumi

(Received September 24, 2021)

1. 研究の目的と意義

1-1 研究の目的

本研究は、小学校新規採用教員が、児童期・生徒期の教職に特化されない教育を受ける時期から、どのようにして小学校教員という職業を選択していったのか、また、どのように小学校教員としてのアイデンティティを形成していったのか等という教職キャリア形成の筋道を、職業的社会的化における予期的社会的化の視点から分析し、考察することを目的とする¹⁾。

職業的社会的化についての研究は、田中一生（1975）「新任教員の職業的社会的化過程～学校組織論的考察～」、田中一生（1977）「新任教員の職業的社会的化に関する調査研究」、田中一生・蓮尾直美（1986）「中堅教員の職業的社会的化に関する調査研究～アイデンティティの形成を中心に」等、1970年代半ばから行われてきた。職業的社会的化についての研究は、組織に入る前の予期的社会的化と、組織に入った後の組織内社会的化に着目して推し進められているが、本研究は、小学校教員のキャリア形成の筋道の中でも、予期的社会的化に着目して分析・考察する。

教育学用語辞典〔第四版（改訂版）〕によると、社会的化（socialization）、職業的社会的化（occupational socialization）、予期的社会的化（anticipatory socialization）について、以下のように説明されている。（岩内・本吉・明石、2011）

「社会的化は人が一人前になっていく過程（プロセス）である。」

「教師や新聞記者、それから医者、大工などの職業に

ついて一人前になる過程を職業的社会的化という。この職業的社会的化では職業に就く前の心構えや技術的な練習をする予期的社会的化と、就いてからの力量を高めるオン・ザ・ジョブの社会的化がある。」

「社会的化は、この他の生活や趣味などの局面（宗教、スポーツ、音楽など）においても成長する過程を説明する概念である。」

また、社会学小事典〔新版〕では、予期的社会的化（anticipatory socialization）は、以下のように説明されている。

「社会的化はふつう、一定の集団に所属し、成員としてそこでの活動に参加することを通して行われる。しかしそれとは別に、これから所属する集団の規範や行動様式を前もって学習し、内面化することもある。後者を予期的社会的化という。社会的化の先取り、将来を見越した社会的化ともいう。準拠集団との関連でマートンが提唱したものの。」（濱嶋・竹内・石川、1997）

これらの説明をもとにすると、教員に向けた予期的社会的化とは、教員として一人前になっていく過程の中でも、教職に就く前に焦点を当てた概念である。教職にまだ就いてはいないが、「一人前の教員になる」という将来を見越して、教職に就くにふさわしい資質・能力、職業観等を得ていく過程を説明する概念ということになる。つまり、教員に向けた予期的社会的化は、一人の人間が、教員集団への仲間入りができるように、教職に携わる集団ならではの規範意識や行動様式、身に付けるべき資質・

能力、求められる役割等について学び、それらを身に付けようとしながら、自他共に教員らしいと感じられるアイデンティティを確立していこうとする過程であると言える。

また、「将来を見越した社会化」（濱嶋・竹内・石川、1997）という言葉に着目すると、予期的社会化の段階は、自分なりの目指す教員像を自覚している状態、ある程度明確な教職に対する概念をもっている状態であるようにも読み取れ、それらに照らし合わせながら成長していこうとするという過程であると言い換えることもできる。

米澤（2015）は、「予期的社会化は、組織参入前のプロセスであるから、組織参入時および参入初期の社会化形成を促進する役割を果たさなければならない。」と述べている。そして、米澤（2015）は、Feldman（1981）の組織的社会化プロセスの4段階について引用しているが、その第1段階の予期的社会化の説明を抜粋すると以下ようになる。

「第1段階である組織参入前の『予期的社会化』では、組織と職務に関する現実を理解し、組織のニーズや価値に適合するスキルや能力を獲得する」（米澤、2015）

これらの米澤とFeldmanの考えをもとにすると、小学校教員の予期的社会化の段階は、小学校という組織や小学校教員の職務、果たすべき役割等に対する理解にとどまらず、その現実を理解し、それらに照らし合わせながら、必要となる資質・能力や職業観等を獲得していこうとしている過程であり、教員になった後の社会化をスムーズに行うための準備期間ということになる。

しかし、これは、小学校教員に「なる」と揺るぎない決意をもった人物には当てはまる説明ではあるが、予期的社会化の段階にスムーズに向かうにはそれまでの醸成期間が重要になってくる。予期的社会化の段階に向かうまでの「小学校の教員になりたいな」、「小学校の先生という仕事も素敵だな」等という醸成期間なくして、「なる」という意志をもった予期的社会化に向かうことはないはずである。

筆者自身の小学校教員としての成長に照らし合わせてみても、教職キャリア形成の筋道は、学校という組織に参入した後、組織内社会化によって本格的になり、目の前の子どもたちのために急速に成長せざるを得ない状況になった。特に、大学の教育学部の附属学校に着任してからは、これまでの赴任校とは異なり、その組織に求められている使命を常に意識して、教員としてのあり方を模索せざるを得なくなった。この組織に参入したことをきっかけにして、「一教員としてのキャリア形成の筋道

は、転勤を繰り返す中でどのような組織に参入し、どのような組織内社会化が求められてきたかということの違いが見られるのではないかと感じるようになった。しかし、組織内社会化の過程の中で、自分の原動力や自分の支えとなったもの等について見つめてみると、予期的社会化の過程で培った資質・能力、職業観等であった。例えば、教員採用候補者選考試験対策で大学4年生の時に書いた小論文を27年後に手に取り、読んでみると、現在の教育観や授業観とほぼ同様のことが記述されていた。養成段階の自分の観がその後の小学校教師として働く自分の核となっていたことを見だし、養成段階の予期的社会化についての研究の意義も実感した。思い起こせば、実際に、養成段階だけでなく、児童期・生徒期に身に付けた資質・能力や職業観等に筆者は助けられ、いくつかの働く上での困難くぐり抜け、壁も乗り越えてきた。そう考えると、養成段階以前の教職を意識した時点から教員としてのキャリア形成が始まっているのではないかと。いや、意識していない時期からも、教員として働く上での素地を身に付けているのではないだろうか。

中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（中央教育審議会、2011）によると、「キャリア発達」とは、「一人ひとりが社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程」と説明されている。また、村上・原・三好（2015）は、「アイデンティティと職業選択は密接に関係している」と述べているが、教員は、自分のアイデンティティを見だしながら自分らしい生き方を実現していく過程の中で、数多くある職業の中から教職を選択するのである。

先に「将来を見越した社会化」について述べたが、教職志望学生として教員養成段階に入った学生たちは、将来を見越した予期的社会化を学部・コース・選修という組織によって意図的・計画的に促されていく過程である。しかし、個々に着目してみると、そういう組織に入学したからといって、「小学校教員になる」という意志をもって明確な将来を見越そうとしている者もいれば、「この選修に入ったのだから小学校の教員になるしかないのかもしれない」というライフ・イベントに影響された思いの者、「この選修に入ったけれど、他の校種や他の職業も気になっている」という迷いをもつ者もあり、予期的社会化が促されていく度合いは個々でまちまちのはずである。

組織的な予期的社会化の過程にいる学生は、これまでの教職に対するとらえや目指す教員像等を具体化、明確化しながら、再構築している。そうしながら、小学校教員に向けた教職キャリア形成の筋道に組織によって方向付けられようとしているが、このような組織的な予

期的社会化の過程であっても、自分自身で予期的社会化を促すことができる状態の学生ばかりではないと考える。

このように、自分の教職人生やアイデンティティを確立していく過程と照らし合わせても、また、職業選択に向かうアイデンティティの確立の過程に着目しても、小学校教員に向かった教職キャリア形成の筋道をとらえるためには、教職に特化されないキャリア教育が行われる段階の児童期・生徒期の段階の筋道も探っていかなければならないのではないかと考えた。そうすることで、教員養成段階の組織的な予期的社会化がスムーズに促される要件も導き出せるのではないかと考えた。

1-2 研究の意義

本研究の意義は、「教員養成段階以前への着目」「小学校教員に向けた教職キャリア形成に焦点化」「複数の観点からの調査を関連付けた分析」の3点である。その3点について、以下に述べる。

(1) 教員養成段階以前への着目

太田(2008)も、「教員志望の決定期は比較的初期であるにもかかわらず、大学入学以前の教育経験に着目した研究は少ない。」と述べているように、この研究の意義の1つめは、教職キャリア形成の道筋の中でも、養成段階以前に着目しているところである。「小学校の教員になりたい」「小学校教員の仕事は自分に向いているかもしれない」等という醸成期間があってこそ、将来を見据える予期的社会化の過程に至ることができると考えられるため、その過程に着目せずして、教職キャリア形成の筋道について結論付けるには不足があると考えた。

新教育社会学辞典によると、予期的社会化の二つの側面について、以下のように説明されている。

「マートンは予期的社会化には二つの側面があるとし、一つは『明示的、熟慮的かつしばしばフォーマル』なそれと、他は『暗黙的、無意識的かつインフォーマル』なそれとを区別した。前者は学校教育や訓練を通じたものであり、後者は社会化する側にも、される側にも意識されることの少ないものである。しかし予期的社会化が注目されるのは、それが暗黙的にインフォーマルになされることにあるという。」(日本教育社会学会、1986)

マートンは、予期的社会化には「明示的、熟慮的かつしばしばフォーマル」と「暗黙的、無意識的かつインフォーマル」の二つの側面があると述べているが、幼少期においては、社会化する側は意識があっても、される側は意識がないという、2つの側面の間のような状態もある。例えば、新教育社会学辞典(日本教育社会学

会、1986)に、「家庭における親の嫉は、現に行儀の悪い子をしつけるだけでなく、将来への見通しをもっているからである」とあるように、親が子どもの将来を見越して、嫉をしたり、習い事等をさせたりする場合もある。

そこで、将来を見据えて明示的、熟慮的に行われる社会化を「予期的社会化」、そこに向かうまでの無意識の段階から「小学校教員になりたい」「小学校教員という職業に興味があるな」という段階を「プレ予期的社会化」と定義して研究を進めることとした。

予期的社会化に向かう醸成期間(プレ予期的社会化)において、「小学校教員になりたい」という思いをもった人物が全て、その思いを強くして「小学校教員になる」という意志をもつ予期的社会化の過程に入るわけではないため、「なる」に向かう要因や時期を含めてとらえていかなければ、教職キャリア形成の筋道を把握したとは言えないと考えた。そうすることで、無意識の段階から、小学校教員に「なりたいたい」から「なる」、「なった」へ向かうつながりを明らかにできるのではないかと考えた。

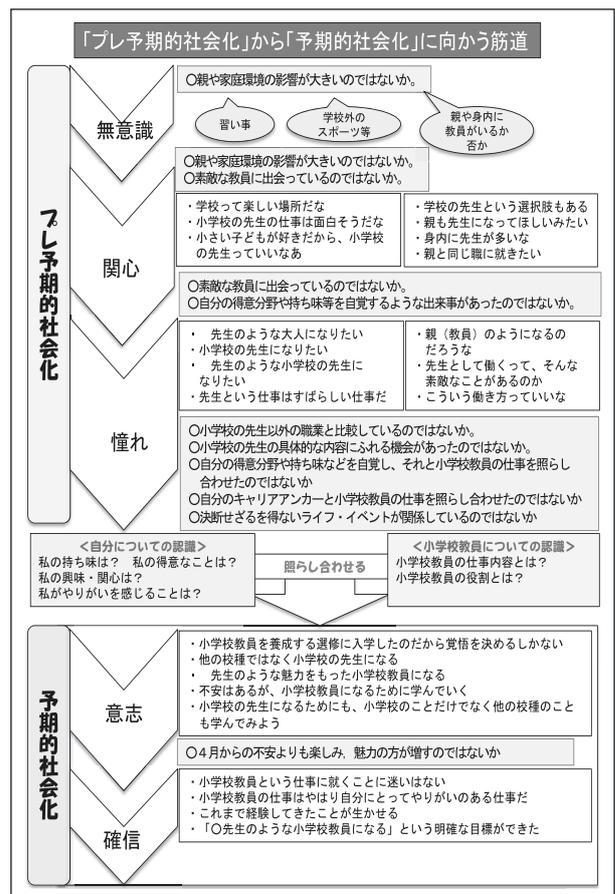


図1 小学校教員に向けての教職キャリア形成の筋道についての予想

(2) 小学校教員に向けた教職キャリア形成に焦点化

研究の意義の2つめは、小学校教員に向けた教職キャリア形成に焦点を絞っているところである。校種の違いは、求められる専門性や文化等の違いも生み出し、プレ予期的社会化や予期的社会化の過程において、その校種の教員に向けた教職キャリア形成の筋道も異なると考えられる。「なぜ、他の校種ではなく小学校教員という職を選択しようとしたのか」という小学校教員ならではの教職キャリア形成の筋道を明らかにしようとしているところに意義がある。

村上・原・三好(2015)が「特に自分と向き合っている者は折り合いをつけることが可能であろう」と述べているように、就きたい職業で求められる資質・能力と今の自分の状況を照らし合わせ、整合性をとろうとすることが予期的社会化であるならば、小学校新規採用教員がもつ特性、自己像と教職に対するイメージを関連付けながら、分析していくことも求められる。

小学校教員に向けてプレ予期的社会化や予期的社会化の過程の中で、「もともと小学校教員に向いているパーソナリティをもっていたのか」「もっているパーソナリティを生かすには小学校教員になることがふさわしいと判断したのか」「『なりたい』という思いや『なる』という決意をもとに、小学校教員に向いているパーソナリティに近づけていったのか」等を探ることで、他の職種や他の校種とは異なる小学校教員ならではのパーソナリティの特質を見いだそうとしているところに意義がある。

(3) 複数の観点からの調査を関連付けた分析

この研究の意義の3つめは、主に以下の6点を関連付けながら、小学校教員に向けた教職キャリア形成の筋道について調査・分析しようとしているところである。

1. 児童期・生徒期に出会った教員が与えた影響
2. 家庭環境が与えた影響
3. ライフ・イベントが与えた影響
4. キャリア形成を促す意図をもって行われた取組の効果と課題
5. 教職を選択する決め手から見える教職へのとらえ
6. 理想の教員像

予期的社会化の段階の教職キャリア形成の経緯についての研究はこれまでもされているが、この6点を明らかにするだけでなく、これらを関連付けながら分析することが、この研究の意義である。

なぜなら、児童期・生徒期における職場体験と職業選択の関係性、恩師に与えられた影響等というように、キャリア発達過程の中の一時期の手立てや出会いによる効果・影響について研究したものが多く、一人の教員の発達・成長をつながりのあるものとしてとらえ、様々

に絡み合っているはずの教職選択に至っていく要因やそのプロセスについての検討が十分に行われていない現状があるからである。

一人の人間が小学校教員として就職するという選択に至るには、様々な要因が絡み合っており、1つの観点からだけでは教職キャリア形成の筋道をとらえていくには不足があると考えたのである。

山崎(2012)は、「個人のライフコースは、その個人単独のライフコースで描くことはできない。一人の人間が、人生を生き、ライフコースをつくりあげていく際に、その人の近くに在って、その人を支え、時にはその人のライフコースを変えるほどに影響を与えていく一群の人が存在しているからである」と述べている。また、山崎(2012)は、プラースの「私たちは…それぞれに独自の『関与者たち(consociates)』、私たちが歩んでいくライフコースのあらゆる段階において深いかかわりをもつ一群の人々をもっている」を引用している。

また、社会学小事典[新版]では、社会化について3つの意味を挙げているが、社会学の専門用語で多く用いられる意味としては、以下のように説明している。

「③個人が他者との相互行為を通して、諸資質を獲得し、その社会に適合的な行動のパターンを発達させる過程、つまり、人間形成の社会的な過程(socialization)。」(濱嶋・竹内・石川、1997)

これらからも分かるように、個々のキャリア形成の道筋には、他者、プラースの言う「関与者たち」が存在する。筆者は、このプラースの言う「関与者」と同様の意味で、ある人物の教職キャリア形成の過程の中でプレ予期的社会化や予期的社会化を促す存在を「担い手」「担い手たち」と表現していく。

先に挙げた1～5の中には、出来事や学校におけるキャリア教育等に関わるものも含まれるが、どれも「担い手」「担い手たち」が設定したものや、「担い手」「担い手たち」が直に関わったことに対する影響についてとらえていくものである。児童期・生徒期からの子どもたちに、「担い手」「担い手たち」としての誰かが直接的に間接的に関わり、影響の度合いが違う要因と要因がつながり合って、教職選択に向かってキャリア形成されていくのではないだろうか。つまり、教職を選択するアイデンティティを確立していく過程の中で、プレ予期的社会化や予期的社会化を促しているのではないだろうか。そのことは、村上・原・三好(2015)は、「アイデンティティと職業選択は密接に関係している」ということから伺われる。

そのため、調査・分析する際には、「担い手」「担い

手たち」や「担い手」「担い手たち」が創り出した出来事等の影響が、きっかけレベル（プレ予期的社会化）なのか、決め手レベル（予期的社会化）なのかで、社会化の促され方や教職キャリア形成の筋道が異なることに留意しなければならないと考える。

2. 調査手続き

本研究においては、教職キャリア形成の筋道におけるプレ予期的社会化や予期的社会化が促された時期を、以下の6つの期に分けてとらえていきたいと考えた。

- ①「早期Ⅰ（小学校入学前～小学校第2学年終わり）」
- ②「早期Ⅱ（小学校第3学年始め～小学校第4学年終わり）」
- ③「早期Ⅲ（小学校第5学年始め～小学校卒業）」
- ④「早期Ⅳ（中学校入学～中学校卒業）」
- ⑤「中期（高等学校入学～高等学校卒業）」
- ⑥「晩期（教員養成段階）」

2-1 調査内容

小学校教員に向けて、児童期・生徒期にどのようにプレ社会化や予期的社会化の筋道を歩んできたのかとらえるために、小学校新規採用教員に、質問紙調査と面接調査を用いて、表1の視点から情報を収集する。

表1 主な調査内容

①家庭環境の影響	身内が教職か否か
	習い事
②出会った教員と教員から受けた影響	影響を受けた教師
	教員から受けた影響
	リーダー経験
③受験やライフ・イベントの影響	選択した入試
	受験時やライフ・イベント時の関与者 進学理由
④受けてきたキャリア教育の影響	小学生時代のキャリア教育
	中学生時代のキャリア教育
	高等学校時代のキャリア教育
⑤職業選択のきっかけや決め手	教員に向いていると言われたか否か
	教員になりたいと思った時期
	教員になる・ならないと決意した時期とその理由
⑥今の意識や状況	今の理想の教師像とその理由

面接調査においては、質問紙調査では浮かび上がりづらい具体的なエピソードをもとにして、情報を収集していく。

2-2 調査の対象

(1) 質問紙調査の調査対象者と調査対象者数

質問紙調査は、Y大学小学校教員養成課程の修了生(X年3月卒業コーホート)39人を調査対象とする。(回答者37人)

(2) 面接調査の調査対象者と調査対象者数

質問紙の回答者の中で小学校教員になった卒業生（継承群3人、非継承群2人）²⁾

2-3 調査方法

(1) 質問紙

無記名多肢選択法及び自由記述法による回答を組み合わせた質問紙を用いた郵送法（郵送配布、郵送回収）による配票調査とする。回答予定時間20分程度とする。

本研究の質問紙調査においては、調査対象者本人へ、質問紙郵送時に、研究説明書を同封し、調査の趣旨・倫理的配慮を提示し、調査への理解を得る。質問紙への回答をもって研究協力の同意することとする。

研究説明書には、以下の点について明記する。

- ・調査対象者への同意は調査票の回答および郵送をもって確認されたものとする
- ・この研究への協力は自由であり、協力しなくても不利益を被ることはないこと
- ・得られた情報は研究以外の目的では使用しないこと

(2) 面接調査

訪問及び研究者の研究室における半構造化面接調査を実施する。面接過程は同意を得て、ICレコーダーにより録音、必要時メモをとる。面接時間は60分～90分とし、必要時延長は概ね100分迄とする。面接場所は調査対象者の希望を尊重し、プライバシーが保たれ、調査対象者の生活に支障をきたさない場所とする。

本研究の面接調査においても、対象者本人へ、文書にて研究や面接内容について説明し、または、面接調査時に手渡しし、研究協力承諾を得る。研究説明書ならびに同意書やインタビューガイドを送付し、協力の承諾する場合には、承諾書に署名をもらう。調査協力の際して調査対象者に文書によって説明を行う。研究説明書に調査の趣旨・倫理的配慮を記述し、提示することにより調査への理解を得る。同意書への署名と提出をもって同意とみなす。

研究説明書には以下の点について明記する。

- ・調査対象者への同意は同意書への署名をもって確認されたものとする
- ・この研究への協力は自由であり、協力しなくても不利益を被ることはないこと
- ・得られた情報は研究以外の目的では使用しないこと
- ・データの匿名化以前であれば研究協力の撤回は可能であること

2-4 調査のスケジュール

(1) 質問紙調査

X年7月下旬に郵送配布し、X年8月上旬までに郵送回収を行う。

(2) 面接調査

対象者のサンプリングを行い、日程調整ののちに、X年8月下旬から11月上旬にかけて1回面接調査を行う。

3. 結果と考察

3-1 プレ予期的社会化のきっかけとそれを得た時期

(1) プレ予期的社会化のきっかけ

プレ予期的社会化は、ドラマや書籍等という間接的なきっかけよりも、直接的な人との関わりや体験によって促されていた。プレ予期的社会化に一番影響を及ぼしたのが、小学生時代の教員であった。なぜなら、研究対象者の65.7%、小学校教員になった研究対象者の67.7%が、小学校期に「自分が教員を志望したり、教育実践を行ったりする際に影響を及ぼした教員に出会った」と回答していたからである。小学校教員の筋道へと向かうには、児童という立場で出会う教員が、人間性、授業力、学級経営力において優れ、働く大人のモデルとして心に焼き付けられる必要があった。また、反面教師とも出会い、なりたい像となりたくない像を明確にしていた事例もあった。

(2) プレ予期的社会化のきっかけを得た時期

研究対象者の43.4%は、教職キャリア形成の筋道を小学校期にスタートし、プレ予期的社会化の段階に入っていた。特に小学校中学年（早期Ⅱ）と小学校高学年（早期Ⅲ）にきっかけを得た研究対象者が多い。きっかけの具体について分析すると、小学校中学年（早期Ⅱ）に教員とのエピソードの記述が集中（67事例中11）していた。研究対象者の51.4%が小学校卒業までに、中学校期も含めた早期全体であると64.9%がプレ予期的社会化の段階に入っている。小学校教員になった研究対象者だけに着目すると、小学校卒業までには54.8%、早期全体であると、67.7%がプレ予期的社会化の段階に入っている。

次に多かったのは、進路決定、入試等によって決断が促される高等学校期の中期であった。ここでの決断が小学校教員養成段階に進むか否かにつながるため、予想通りであった。「小学校で出会った憧れの教員の姿が忘れられない」「担任や友達に『先生に向いている』と言われたこと」等をきっかけにしていた。

大学（晩期）入学前までに、プレ予期的社会化の段階に入っている研究対象者は86.5%であった。教員養成段階に入ってからきっかけを得た研究対象者も13.5%（5人）、「ずっとどの職に就こうか迷っていた」研究対象者も5.4%（2人）、「教員採用試験の時期まで迷って

いた」研究対象者も2.7%（1人）いた。

3-2 「小学校の先生になる」と決意し、予期的社会化が促された時期とその決め手

(1) 「小学校教員になる」と決意し、予期的社会化が促された時期

「小学校教員になる」と決意し、予期的社会化の段階に入った時期は、大学への進路について考える高等学校第2、3学年と附属小学校における教育実習以後に集中していた。小学校教員になった研究対象者に着目すると、養成段階に入るまでに58.1%が予期的社会化の段階に入っている。これらの研究対象者は、ある程度スムーズに大学入学後のカリキュラムになじめていったのではないかと考える。大学入学後に「小学校教員になる」と決意した研究対象者は48.4%いるが、この中には、大学入学以前にも決意しているがさらに確信を得た時期を回答していた者も含まれている。小学校教員になった研究対象者の約40%は、大学入学前にはプレ予期的社会化の段階か、プレ予期的社会化の段階以前ということになる。大学入学前までにプレ予期的社会化の段階に入っていない者が19.4%（6人）[全体では9人、24.3%]おり、この場合は、組織によって意図的・計画的に予期的社会化が促進される教員養成段階における学修が、本人の思いとずれる可能性もあり、改めて、高等学校期である中期の進路指導やキャリア教育のあり方、教員養成段階のキャリア教育のあり方について見つめ直す必要性を感じた。

(2) 「小学校の教員になる」と決意した決め手

表2を見ても分かるように、小学校教員との出会いによってきっかけを得たプレ予期的社会化とは異なり、小学校教員という職業に対するとらえと照らし合わせて決断した研究対象者が多かった。「教職へのとらえ」に関わる回答をみると、やりがいについて具体的にとらえたものが多く、それらは、「教える喜びを味わうことができる」「毎日が刺激的・同じ日はない・創意工夫ができる」「子どもの成長や人生に携わることができる」「自分自身の成長につながる職業」「安定を得られる」「他の職業と比較して」に分類できた。

継承群（親が教員）は、親と接する中で得たキャリア形成のイメージとそれをもとにした「自分にもできそうだ」という有能感や「自分もあのようになっていくのだろう」という期待感をもって養成段階に入り、小学校教員となる筋道へと着実に向かっていった。教職に対するイメージがよくない場合は、養成段階には入ってこないと考えられるため、継承群にとって親はキャリアモデルである。日常的に関わる存在だからこそ、親から受けた影

表2 「教職に就きたい」という思いをもったきっかけと「教職に就く」と決意した決め手の分類の比較

	「教職に就きたい！」というきっかけの分類 [n=67]			「教職に就く！」と決意した「決め手」の分類 [n=98]				
	分類	個	%	分類	個	%		
1	分類5	担い手・担い手たちの影響	30	44.8	分類4	教職に対するとらえ(教職観)	28	28.6
2	分類2	自分の夢・ミッション・持ち味の自覚	12	17.9	分類5	担い手・担い手たちの影響	18	18.4
3	分類4	教職に対するとらえ(教職観)	9	13.4	分類6	ライフ・イベント	17	17.3
4	分類6	ライフ・イベント	7	10.4	分類1	子どもへの興味・関心	16	16.3
5	分類1	子どもへの興味・関心	2	3.0	分類8	教員養成段階における様々な経験と照らし合わせて	8	8.2
6	分類3	子どもへの思い	2	3.10	分類3	子どもへの思い	4	4.1
7	分類7	キャリア教育の取組をもとに	1	1.5	分類2	自分の夢・ミッション・持ち味の自覚	3	3.1
8	分類8	小学校教員養成段階で出会った仲間が存在	1	1.5	分類7	キャリア教育の取組をもとに	2	2.0
9	分類9	ドラマ	1	1.5	分類9	地域への愛着	2	2.0
10	分類10	本	1	1.5				

響を自覚していない継承群もいるが、その場合は、親は将来について考える際の相談相手としてとらえていた。影響を自覚している・していないにかかわらず、継承群にとって親は、出会った教員とは存在の意味の異なる重要な「担い手」「担い手たち」ということができる。

3-3 「担い手」「担い手たち」の影響

(1) 親の影響

「習い事や学校外のスポーツ等に取り組みさせる」「適性を見抜く」「教員に向いていると価値付ける」等、親はプレ予期的社会化・予期的社会化に向かう基盤をつくる存在となっている。父親よりも母親の方が、「先生に向いている」と研究対象者たちに声を掛けていた。Y県出身者でY県の小学校教員になった研究対象者の4割が継承群であった。両親とも教員であるという継承群もいるが、全員父親が教員であった。学校体験制度や教師力向上プログラム等、Y県教育委員会の取組や、若手教員の大学の教員養成後の姿を把握しやすい教員である親が、「Y県の教員になるのであれば、教員養成を行う地元の大学へ」という傾向を示し始めているのではないかと考

える。

(2) 教員の影響

① 影響を受けた教員はどのような存在であったか

研究対象者の94.5%が、「自分が教員を志望したり、教育実践を行ったりする際に影響を及ぼした教員に出会った」と回答した。そして、半数以上が小学校卒業まで(早期I～早期III)にプレ予期的社会化の段階に入っており、各期で影響を受けた教員はどのような存在であったか分析すると、表3のようになった。

② リーダー経験から見える小学校教員になった研究対象者の児童期・生徒期の人物像

小学校教員になった研究対象者の29%が、中学校期に「生徒会役員・執行部」の仕事に任されている。高等学校期では「生徒会役員・執行部」が19.3%、「生徒会長」が9.7%であり、足すと29%が生徒会関係の仕事で教員から任されている。また、「中学校」期には22.6%、「高等学校」期には25.8%が部活動の「部長・副部長」を教員から任されている。小学校教員になった研究対象者は、生徒期(中学校期・高等学校期)に、学校全体の

表3 研究対象者に影響を受けた教員像

小学校期(早期I～III)に影響を受けた教員	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校教員や大人として目指したいモデル ・憧れの存在
中学校期(早期IV)や高等学校期(中期)に影響を受けた教員	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の持ち味や可能性等をとらえて「先生に向いている」と声を掛けてくれた存在 ・授業の面白さを実感させてくれた存在 ・パーソナリティの自覚を促したり、形成を促したりする存在 ・リーダーに推薦して、学級経営や集団をつくっていく際に必要な教員として必要となる資質・能力に磨きを掛けてくれた存在
大学期(晩期)に影響を受けた教員	<p><教育実習の指導教員></p> <ul style="list-style-type: none"> ・新たなモデル <p><大学の教員></p> <ul style="list-style-type: none"> ・理論を実践の往還をサポートする存在 ・小学校教員になるという決断をする際の相談相手

運営を教員に任される程のリーダー性や得意分野をもち、学級経営につながる資質・能力を身に付けるリーダー経験を積み重ねていた者が多かった。真面目で教員の思いや意図をくみ取る資質・能力が高い上、リーダーを任されるため、他の児童・生徒よりも、教員と関わる機会が多かったと考えられる。

(3) キャリア教育の影響の影響

小学校卒業までにプレ予期的社会化が促されると、中学校の職場体験で学校を選択し、その約90%が小学校教員となっている。プレ予期的社会化の段階であるが希望とは異なり学校で職場体験できなかった研究対象者の中には、自分がやりがいを見出せる仕事はやはり教職であるという自覚につながった者もいた。また、違う校種に行くことで、自分は小学校教育に携わりたいという興味・関心を自覚した者もいた。希望の職場で体験できることも重要であるが、基礎的・汎用的な資質・能力を育んでいく発達段階においては、体験に留まらず、自分の持ち味や興味・関心と向き合う時間の確保が必要であると改めて感じた。

「立志式」の経験者は少なかったが、経験者にとっては、高等学校、大学と進むこれからの進路やそこに至る過程について考え、そのために今すべきことを見つめ直す機会となっており、効果的な取組であると感じた。

優秀な人材確保のために始まったY県教育委員会主催の「高校生のための教職セミナー」は、予期的社会化の段階に入った研究対象者（Y県出身者18人中4人）が、自分の意志で参加していた。しかし、12人が「そのようなセミナーがあると知らなかった」と回答しており、学校間による意識の差を感じた。

(4) ライフ・イベントの影響

ライフ・イベントは、否が応でも人に決断を迫る分岐点となる。約80%の研究対象者は、大学入試によって、小学校教員に向けたプレ予期的社会化や予期的社会化が促されていた。大学受験や大学入学は、自分の憧れや像を明確に自覚し、キャリア形成の筋道を方向付けていた。組織によって意図的・計画的に行われる予期的社会化の段階（教員養成段階）の中で、自らも予期的社会化の段階にいる学生は、教員採用候補者選考試験に向けて、自分のキャリアアンカーや自分が養成段階の中で取り組んできたことと向き合い、「小学校教員になる」という決断を下している。

一般入試受験者は、センター試験の結果と照らし合わせて、大学を決定している場合が多く、選修のカリキュラムの実際を把握していなかったり、小学校教員になるかどうか迷っている状態で入学したりしていた。小学校

教員になった者に着目しても、プレ予期的社会化の段階に入ったのも晩期、予期的社会化の段階に入ったのも晩期という研究対象者、ずっとどの職に就こうか悩んでいて、晩期に「小学校教員になる」と決意し、予期的社会化の段階に入った研究対象者は、全員一般入試での入学者であった。

教育実習は、教職に就くか就かないか、筋道を方向付けていく重要なポイントとなる。就くと決意して望んだ研究対象者にとっては、さらなる小学校教員として働く魅力にふれ決意を新たにしたり、力量の高い先輩教員と出会い、目指す教員像を明確にしたりする機会となっていた。

(5) 教員養成段階で最終的に「なる」「ならない」に向かう要件

分析を通して明らかになった予期的社会化を促し、最終的に「なる」に向かう要件を3つ挙げる。

1つめは、養成段階に影響を受けた教員がいることである。教育実習の指導教員の姿から、目指す教員像や教職観を明確にしていた。また、実践と省察を繰り返す中での一番の支えが大学教員であり、その中でも、教職経験のある大学教員との関わりで筋道を強固にしていた。

2つめは、教職のやりがいを実感していることである。「なる」決断をした研究対象者が、創意工夫できることや子どもの人生に携わることにやりがいを感じていたのに対して、「ならない」決断をした研究対象者はそれらに苦痛を感じたり、給料に見合わないと考えていたりした。

3つめは、教職を神聖化しすぎないことである。「子どもと向き合う覚悟が決まらない。自分なんかが…」という理由で教職を断念したり、断念しそうになったりした研究対象者もいた。組織内社会化が順調に促進される人材を育成するために、予期的社会化の段階で身に付ける資質・能力について今一度見つめ直したい。

4. まとめと課題、今後に向けての提案

本研究を通して、今後、以下のことについての検討や共通理解が必要なのではないかということも明らかになった。

○小学校（早期Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）において

- ・小学校教員が魅力的な存在であることを保障する
- ・教員が働く大人の代表として子どもたちの前に立っているという認識をもてるようにしていく

○中学校（早期Ⅳ）において

- ・職場体験の充実を図り、生徒の今や今後のキャリア形成につなぐ
- ・「立志式」を活用し、キャリア発達段階にふさわし

い見方・考え方を獲得できるようにする。

○高等学校（中期）において

- ・キャリア教育や進路指導、総合的な探究の時間の学びを一人ひとりのキャリア形成とつなぐ
- ・「高校生のための教職セミナー」の目的と必要性、切実感を高等学校の教員と共有する

○養成段階（晩期）において

- ・非継承群が教職に対する肯定的なとらえをもてるようにする
- ・大学教員と附属教員が教職志望学生に対しての役割を再認識する
- ・教職が果たす多様な使命についての理解を深める
- ・大学期（晩期）においても、学生のコース・選修等でのチーム力の向上を意識して指導する
- ・小学校教員に向けた筋道から離れていく人物の資質・能力、キャリアアンカーを見極める

○教員養成において（現職教員段階）

- ・教職が果たす多様な使命についての理解を深める
- ・教職員育成指標に掲げられている資質・能力の意味について深く考える

本研究によって、1つの大学の小学校教員養成の課程を卒業した人物の小学校教員に向けての筋道を方向付ける複数の要因について明らかにすることができた。他校種の教員になる筋道との比較はできていないため、小学校教員に向けた筋道に独自性があるのかどうかについては、さらなる検証が必要である。

また、一人ひとり異なる小学校教員に向けた教職キャリア形成の筋道を、さらにいくつかに類別し、小学校教員へと育つ流れを汎用性のあるものとして提示できれば、教員不足を解消するとともに、優秀な人材を教員養成へと導く戦略を見いだすことにつながるのではないかと考える。今後の課題として、取り組んでいきたい。

<注>

- 1) 本論文の内容は、放送大学大学院文化科学研究科（修士課程）修士論文である藤上真弓（2020）：「児童期・生徒期からの小学校教員に向けた教職キャリア形成の筋道～予期的社会化の視点から～」から抜粋し、付加・修正を加えたものである。
- 2) 「継承群」とは、親が教員である教員、「非継承群」は親が教員ではない教員と定義して研究を進めた。

<参考文献・引用文献>

岩内亮一・本吉修二・明石要一編集代表（2011）：『教育学用語辞典〔第四版（改訂版）〕』、学文社、

p.116

太田拓紀（2008）：「教師志望の規定要因に関する研究：大学生の家庭的背景に着目して」、『京都大学大学院教育学研究科紀要54巻』、p.319、<http://hdl.handle.net/2433/56019>(2019年5月3日参照)

田中一生（1975）：「新任教員の職業的社会化過程～学校組織論的考察～」、『九州大学教育学部紀要教育学部門(20)』、九州大学教育学部、p137-151、

田中一生（代表者）（1977）：「新任教員の職業的社会化に関する調査研究」、『科学研究費補助金研究報告書』

田中一生・蓮尾直美（1986）：「中堅教員の職業的社会化に関する調査研究～アイデンティティの形成を中心に～」、『九州大学教育学部紀要（教育学部門）第31集別冊』

中央教育審議会（2011）：「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」、p.17、http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf（2019年4月8日参照）

日本教育社会学会（1986）、『新教育社会学辞典』、東洋館出版社、p.834

濱嶋朗・竹内郁郎・石川晃弘編（1997）：『社会学小事典〔新版〕』、有斐閣、pp.246-247、p.607

村上竜馬・原千恵子・三好一英（2015）：「大学生のアイデンティティと職業選択の年次変化～アンケート調査結果の分析～」、『東京福祉大学・大学院紀要6巻1号』、p.39、<http://hdl.handle.net/10087/9664>(2019年2月3日参照)

山崎準二（2012）：『教師の発達と力量形成～続・教師のライフコース研究』、創風社、p.29

米澤聡士（2015）：「予期的社会化と企業内教育・訓練—外航海運企業の大学運営に関する事例研究—」、『経済集志 第84巻 第4号』、日本大学経済学部、p.325、http://www.eco.nihonu.ac.jp/about/magazine/shushi/pdf/84_04/84_4_08.pdf（2019年10月12日参照）

Feldman.D.C.（1981）：「The Multiple Socialization of Organaization Members」、『Academy of Management Riview.Vol.6、No.2』、p.311、http://www.eco.nihonu.ac.jp/about/magazine/shushi/pdf/84_04/84_4_08.pdf（2019年10月12日参照）